

『資本論』 第2部 資本の流過程

<要約:紅林進>

第1篇 貨幣資本の循環

貨幣資本の循環をあらわす定式は次のようになる。

$$G—W \cdots P \cdots W' —G'$$

ここで点線は流通が中断されていることを示し、 W' と G' は、剰余価値によって増大した W を表している。

G:貨幣 W:商品 P:生産資本 W':価値増殖した商品 G':価値増殖した貨幣
貨幣を出発点とする資本の循環運動

第1節 第一段階 G—W

G—W は、ある貨幣額がある額の商品に転換されることを表している。

(資本主義的生産においては)W は労働力(A)と産手段(Pm)を買い入れることである。

A

G—W

Pm

資本が労働力(A)を購入するためには、(生産手段から切り離された)「自由な賃金労働者」の存在が必要である。

資本主義的生産は、商品と剰余価値を生産するだけでなく、それは賃金労働者の階級を再生産し、しかもますます拡大される規模でそれを再生産し、直接生産者の巨大な多数を賃金労働者に転化させる。

それゆえ、「G—W \cdots P \cdots W' —G'」は、その進行の第一の前提が賃金労働者階級の恒常的な現存なのだから、すでに、生産資本の形態にある資本を前提にしており、したがって生産資本の循環の形態を前提にしている。

第2節 第二段階 生産資本の機能

貨幣資本の生産資本への転化によって、資本価値は一つの現物形態を受け取っているのがあるが、この形態ではそれは流通を続けることができないで、消費に、すなわち生産的消費に、入らなければならないのである。

第一段階の結果は、第二段階の、資本の生産段階の開始である。

A

この運動は、G—W \cdots P として表される。

Pm

ここにある点線は、資本の流通は中断されているが、資本は商品流通の部面から出て、生産部面に入るのだから、その循環過程は続いている、ということを示している。

資本主義的生産の根本条件＝賃金労働者階級の存在を生み出すその同じ事情は、すべての商品生産の資本主義的商品生産への移行を促進する。

生産の社会的形態がどうであろうと、労働者と生産手段とはいつでも生産の要因である。およそ生産が行われるためには、両方が結合されなければならない。この結合が実現される特殊な仕方は、社会構造のいろいろな経済的時代を区分する。当面の場合には、自由な労働者がその生産手段から分離されているということが、与えられた出発点である。こうして一つにされた商品形成の人的要因と物的要因とが一緒に入っていく現実の過程、生産過程は、それ自身が資本の一機能＝資本主義的生産過程になるのであって、その本姓は本書の第一部で詳しく説明されている。

剰余価値の生産において演ずる役割の相違によって、下記のように区分される。

生産手段＝不変資本

労働力＝可変資本

生産資本は、それが機能している間に、それ自身の諸成分を消費して、それらの成分をさらに価値の高い生産物量に転換する。

生産された商品の価値＝その商品の生産のために消費された生産資本の価値 P

+

この生産資本によって生み出された剰余価値 M

第3節 第三段階 W'—G'

商品は、すでに価値増殖された資本価値の、直接に生産過程そのものから生じた機能的存在形態として、商品資本になる。

資本は、商品形態にあつては商品機能を行わなければならない。資本を構成する諸物品は、はじめから市場のために生産されたもので、売らなければならない、貨幣に転化されなければならない。つまり W—G という運動を通らなければならない。

$$W' = W + w$$

w: W の増加分(剰余労働によって作られた剰余価値)

W'、価値増殖された資本が商品資本のままになっていて、市場に滞留している間は、生産過程は停止している。この資本は、生産物形成者としても価値形成者としても働いていない。資本がその商品形態を突き放してその貨幣形態をとる(W'—G')速さの相違にしたがつて、すなわつられる速さの相違にしたがつて、同じ資本価値が非常に違う程度で生産物形成者および価値形成者として役立ち再生産お規模が拡大されたり縮小されたりする。

商品量 W' 葉、価値増殖された資本お担い手として、さらにその全体が変態 W'—G' を経なければならない。

G' は W' の実現尾結果でしかない。W' も G' も両方とも、増殖された資本価値の別々の形態、その商品形態と貨幣形態であるだけであつて、この増殖された資本価値だということは、両方に共通である。

第4節 総循環

流通に属する二つの変態 $G-W$ と $W'-G'$ のどちらでも、同じ大きさの同時に存在する価値存在が相対して互いに置き換えられるということである。価値変化はただ変態 P すなわち生産過程だけで起きるのであり、したがって、生産過程は流通の単に形態的な諸変態に対して、資本の実質的な変態として現れる。

資本価値がその流通段階でとる二つの形態は、貨幣資本と商品資本という形態である。生産段階に属するその形態は、生産資本という形態である。総循環の経過中にこれらの形態をとっては捨て、それぞれの形態でその形態に対応する機能を行う資本は、産業資本である。ここで産業というのは、資本主義的に経営されるすべての生産部門を包括する意味で言うのである。

貨幣資本、商品資本、生産資本は、独立な資本種類、すなわち、それらの機能が同様に独立な互いに分離された諸事業部門の内容をなしているような独立な資本種類を表しているのではない。これらの資本はここではただ産業資本の特殊な諸機能形態を表しているだけで、産業資本はこれらの機能形態を三つとも次々にとって行くのである。

資本の循環は、ただそのいろいろな段階が停滞することなく次の段階に移ってゆく限りで、正常に進行する。もし資本が $G-W$ で停滞すれば、貨幣資本は凝り固まって蓄蔵貨幣になる。もし生産段階で停滞すれば、一方には生産手段が機能しないで寝ており、他方には労働力が使われないままになっている。もし最後の段階 $W'-G'$ で停滞すれば、売れないで堆積した商品が流通の流れをせき止める。

他方、循環そのものが、一定の期間個々の循環過程に資本が固着することを必然にすることとは、事柄の性質上当然のことである。産業資本は、その諸段階のそれぞれで一定の形態に、すなわち貨幣資本、生産資本、商品資本として、拘束されている。産業資本は、そのつどの形態に相応した機能を果たしてから、初めて、新たな転化段階に入ることのできる形態を受け取る。

一般的定式では、 P の生産物は、生産資本諸要素とは物質的に違った物とみなされる。すなわち、生産過程から分泌された存在をもっており、生産要素の使用形態とは違った使用形態をもっている対象とみなされる。そして、生産過程の結果が物として現れる場合にはいつでもそうなのであって、生産物の一部分が、新たに繰り返され生産意再び要素として入って行く場合にも、やはりそうである。

ところが、独立の産業部門でも、その生産過程の生産物が新たな対象的生产物ではなく商品ではないような産業部門がある。その中で経済的に重要なのは交通業だけであるが、それは商品や人間のための本来の運輸業である事もあれば、単に報道や書信や電信などの伝達であることもある。

A

運輸業についての定式は、 $G-W \quad \dots P-G'$ となる。

P_m

この定式は、貴金属生産の定式とほとんどまったく同じ形式を持っているのであり、ただ、運輸業では、 G' は生産過程で生み出された有用効果の転化形態であって、この過程で生み出されてそこから突き出された金銀の現物形態ではないだけである。

産業資本は、資本の存在様式のうち、剰余価値または剰余生産物の取得だけではなく同時にその創造も資本の機能であるところの唯一の存在様式である。だから、それは生産の資本主義的性格を条件とする。産業資本の存在は、資本家と労働者との階級対立の存在を含んでいる。

貨幣資本の循環は、産業資本の循環のもっとも一面的な、そのためにもっとも適切でもっとも特徴的な現象形態なのであって、価値の増殖、金儲けと蓄積という産業資本の目的と推進動機とが一目でわかるように示されている。

第2章 生産資本の循環

生産資本の循環の一般的定式は次のようになる。

$$P \cdots W' - G' - W \cdots P$$

この循環の意味するものは、生産資本お周期的に繰り返される機能、つまり再生産であり、言い換えれば価値増殖に関連する再生産過程としての生産資本お生産過程である。剰余価値の生産であるだけでなく、その周期的な再生産である。

生産資本の循環形式では、流通過程が生産資本による再生産の媒介として現われ、しかもその流通過程は、商品交換を媒介する単純な商品流通の形式をとる。生産資本による再生産は、剰余価値をすべて消費する単純再生産の場合と、剰余価値を資本に追加して拡大再生産が行われる場合とに分けて分析される。

第1節 単純再生産

生産資本の単純再生産

ここでも、第1章で前提にしたように、不変な諸事情と商品の価値どおりの売買とを前提とする。この仮定の下では、剰余価値は全部資本家の個人的消費に入る。商品資本 W' の貨幣への転化が行われれば、その貨幣総額の中の資本価値を表す部分は、引き続き産業資本の循環の中で流通する。もうひとつの部分、金メッキされた剰余価値は一般的な商品流通に入り、これは資本家から出発する貨幣流通ではあるが、彼の個別資本の流通の外で行われる。

$$\begin{array}{ccccccc}
 & & & & & & A \\
 & W & & G & W & & \\
 W' & + & \text{---} & G' & + & & P_m \\
 & & & G & w & &
 \end{array}$$

第2節 蓄積と拡大された規模での再生産

蓄積または拡大された規模での再生産は、剰余価値生産の不断の拡大のための、したがって資本家の致富のための手段、資本家の個人的目的として現れ、資本主義的生産の一般的傾向の内に含まれているのであるが、それは、さらにまた、すでに第一部で明らかにしたように、資本主義的生産の発展によって各個の資本家にとってのひとつの必然事になる。彼の資本の不断の増大が、その資本の維持の条件になるのである。

$$\begin{array}{ccccccc}
 & & & & & & A \\
 P \cdots W' - G' - W' & & & & \cdots P' & & \\
 & & & & & & P_m
 \end{array}$$

この定式は、生産資本がより大きい規模でより大きい価値を持つ物として再生産され、増大した生産資本として其の第二の循環を始めるといふこと、または、同じことであるが、その第一の循環を繰り返すといふことをあらわしている。

$P \cdots P'$ があらわしているのは、剰余価値が生産されたということではなく、生産された剰余価値が資本化され、したがって蓄積されたということであり、したがってまた、 P' は、 P とは違って、最初の資本価値 $\cdot P$ プラス・その運動によって蓄積された資本の価値から成っているといふことである。

生産過程の拡大が可能となるために必要な比例関係は、勝手に動かせるものではなく、技術的に規定されているのだから、実現された剰余価値は、たとえ資本化されることになっても、いくつもの循環が繰り返されてからはじめて、現実追加資本として機能すること、すなわち過程進行中の四本価値の循環に入ることができる大きさに成長することができる。(したがってその大きくなるまで積み立てられなければならない)といふことも多い。つまり、剰余価値は蓄蔵貨幣に硬化して、この形態で潜在的な貨幣資本をなすのである。潜在的といふのは、それが貨幣状態にとどまっている間は、資本として働くことができないからである。このようにここでは貨幣蓄蔵は、資本主義的蓄積過程に包摂され手それに随伴してはいるが、同時にこの過程とは本質的に区別される一契機として現れるのである。

第3節 貨幣蓄積

金メッキされた剰余価値 g がすぐにまた進行中の資本価値に付加えられて資本 G と一緒に G' という大きさに循環過程に入ることができるかどうかは、 g の単なる存在とは無関係な事情にかかっている。 g が、第一の事業とは別に起こされる第二の独立な事業で貨幣資本として用いられるとすれば、 g がこれに充用されるのは、ただ、このような事業に必要な最小限の大きさを g が持っている場合だけだといふことは、明らかである。 g が元の事業の拡張に用いられるとしても、 P の素材的要因のあいだの割合やそれらの価値の割合は、やはり g の一定の最小限の大きさを要求する。その最小限度の大きくなるまで、 g は積み立てられて、ただ、形成過程にある成長中の蓄蔵貨幣の形態で存在しているだけである。

蓄蔵貨幣という形態は、ただ、流通していない貨幣の形態、流通を中断されているので貨幣形態で保存される貨幣の形態でしかない。

ここでは蓄蔵貨幣が貨幣資本の形態として現れ、また貨幣蓄蔵が資本の蓄積に一時的に伴う課程として現れるのであるが、それは、貨幣が個々では潜在的な貨幣資本の役割をするからであり、またそれをする限りでのことである。また、貨幣蓄蔵、すなわち貨幣形態で存在する剰余価値の蓄蔵貨幣状態は、剰余価値が現実に機能する資本に転化するために資本の循環の外で行われる帰納的に規定された準備段階だからである。つまり、蓄蔵貨幣はこのような其の規定によって潜在的に貨幣資本なのであり、したがってまた、それが過程に入っていくため Π 到達していなければならない大きさも、生産資本お其の都度の価値構成によって規定されているのである。しかし、それが蓄蔵貨幣状態にある限り、それはまだ貨幣資本として機能していないのであり、まだ有給している貨幣資本なのである。以前の要素の機能を中断しているのではなく、まだその機能を行う能力のない貨幣資本なのである。

我々がここで考えているのは、本来の実在的形態での貨幣積立であり、現実の蓄蔵貨幣としてのそれである。それは、 W' を売った資本家の単なる売掛金や債権の形で存在することもありうる。そのほかにも、さしあたりのこの潜在的貨幣資本は、たとえば銀行にある利子付預金や手形や何らかの種類の有価証券というような、貨幣を生む貨幣の姿でも存在するのであるが、このような形態はここでの問題ではない。

第4節 準備金

剰余価値の存在形態としての蓄蔵貨幣は、貨幣蓄積財源であり、資本蓄積が一時的にとる貨幣形態であって、其の限りではそれ自身資本蓄積の条件でもある。しかし、この蓄積財源は、特殊な副次的役立ちをすることもできる。すなわち、資本お循環過程が $P \cdots P'$ という形態をとらなくても、つまり、資本主義的再生産が拡大されてなくても、資本の循環過程に入ることができるのである。

もし過程 $W \cdots G'$ が正常な限度を越えて延びるならば、つまり商品資本の貨幣形態への転化が異常に妨げられるならば、あるいはまた、この転化は行われても、たとえば貨幣資本が転換されるべき生産手段の価格が循環の始まったときの水準よりも高くなっているならば、そのような場合には、蓄積財源として機能している蓄蔵貨幣を用いてそれに貨幣資本またはその一部分の代わりをさせることができる。このようにして、貨幣蓄蔵財源は、蓄積の循環の攪乱を調整するための準備金として役立つのである。

単純再生産と拡大された規模での再生産とを包括する生産資本の循環の一般的定式は、次のようになる。

$$\begin{array}{ccc} 1 & 2 & A \\ P \cdots W' - G' \cdot G - W & \cdots P(P') & \\ & & P_m \end{array}$$

$P=P$ ならば、2の G は $G' \cdot \text{マイナス} \cdot g$ に等しい。

$P=P'$ ならば、2の G は $G' \cdot \text{マイナス} \cdot g$ よりも大きい。

すなわち、 g の全部かまたは一部が貨幣資本意転化しているわけである。

生産資本の循環は、古典派経済学が産業資本の循環過程を考察する際に用いている形態である。

第3章 商品資本の循環

商品資本の循環を表す一般的な定式は次のようになる。

$$W' - G' - W \cdots P \cdots W'$$

この第三の形態と前の二つの形態との違いは次の点に表れている。

(1) 第三の形態では、二つの反対の段階からなる総流通が循環を開始するのであるが、第一の形態では流通が生産過程によって中断され、第二の形態では、二つの互いに補足しあう段階からなる総流通は、ただ再生産過程の媒介として現れるだけであり、したがって、 $P \cdots P$ の間の媒介運動を形成している。 $G \cdots G'$ では流通形態は、 $G - W \cdots W' \cdots G' = G - W - G'$ である。 $W \cdots W'$ でも流通形態はやはりこの後のほうの形態を持っている。

(2) 商品諸本の循環は、資本価値で始まるのではなく、商品形態で増殖された資本価値で始まるのであり、したがって、はじめから単に商品形態で存在する資本価値の循環だけではなく剰余価値の循環を含んでいる。

第一の貨幣資本の循環形式では生産過程が媒介的手段とみなされ、第二の生産資本の循環形式では流過程が媒介的役割において理解された。この第三の商品資本の循環形式では、総流通から始まり、生産過程と流過程が相互媒介の役割において把握されることになる。

第4章 循環過程の三つの図式

三つの図式は、Ck を総流通過程とすれば、次のように表すことができる。

(I) $G \rightarrow W \cdots P \cdots W' \rightarrow G'$

(II) $P \cdots Ck \cdots P$

(III) $Ck \cdots P(W')$

三つの形態を総括してみれば、過程のすべての前提は、過程の結果として、過程自身によって生産された前提として現れている。それぞれの景気が出発点、通過点、帰着点として現れる。総過程は生産過程と流通過程の統一として現れる。生産過程は流通過程の媒介者になり、また逆に後者が前者の媒介者になる。

三つの循環のどれにも共通なものは、規定的目的としての、推進動機としての価値の増殖である。

自分を増殖する価値としての資本は、階級関係を、賃労働としての労働の存在に基づく一定の社会的性格を含んでいるだけではない。それは、ひとつの運動であり、いろいろな段階を通る循環過程である。

資本は、三つの循環を統合して流通過程と生産過程を継起的に経過しつつ、自己増殖する運動体であり、その本質は静止物としては理解できない。

第5章 流通期間

生産期間：資本が生産部面にとどまっている期間

流通期間：資本が流通部面意にとどまっている期間

生産期間 > 労働過程の期間

生産手段の生産期間(以下の期間を包含)

(1) 生産手段として機能している期間

(2) 生産過程が中断され、したがって生産過程に合体されている生産手段の機能も中断されている中休み期間(夜間など)

(3) 生産手段が家庭の条件として準備されており、したがってすでに生産資本を表しているが、まだ生産過程に入っていない期間(在庫期間など)

流通期間と生産期間は互いに排除し合う。

資本は流通期間には生産資本として機能せず、商品も剰余価値も生産しない。

したがって資本は流通期間をできるだけ短縮しようとする。

流通期間が長いと、商品によっては、痛みや損傷で価値を減少させることもある。

第6章 流通費

第1節 純粹な流通費

1 売買期間

2 簿記

3 貨幣

第2節 保管費

1 在庫形式一覧

2 本来の賞品在庫

第3節 運輸費